

読影のお作法 —連続画像スライスで追う骨軟部疾患の診断—

企画・編集：大木 望 長崎大学病院 放射線科
稲岡 努 東邦大学医療センター佐倉病院 放射線科

序 説

これまで各領域を取り上げてきた『読影のお作法—連続画像スライスで追う』シリーズは、今回、骨軟部領域に焦点をあてています。

若手の先生方に骨軟部領域の画像診断について尋ねると、「解剖が複雑で苦手」との声をよく耳にします。確かに、骨軟部領域は上肢だけでも肩・肘・手、下肢では股・膝・足と3部位ずつがあり、さらに脊椎(頸椎・胸椎・腰椎)、骨盤や仙腸関節、手指・足趾関節に至るまで多岐にわたります。しかも関節は骨のみでなく、関節軟骨、関節包、半月板、椎間板、靱帯、腱、筋といった多様な構造から成り立っており、それぞれの関節ごとの解剖を理解することが欠かせません。そのうえで患者背景や受傷機転を踏まえ、部位ごとに多い損傷や疾患を想定しながら異常を探していく必要があります。

骨軟部領域の画像診断において、MRIは欠かせない検査です。本特集では、日常診療でよく経験する代表的な関節疾患に加え、スポーツ外傷として頻度の高い筋損傷やシンスプリントを取り上げ、それぞれを連続画像で解説していただきました。従来と異なる形式での提示であり、執筆の先生方には大きなご負担をおかけしましたが、読影の基本から重要な着眼点までを明快にご解説いただいております。

本特集を通じて、単なる所見の暗記ではなく、病変を見きわめるための思考の流れを追体験することで、読影力を一段と高めていただけることと思います。私自身も骨軟部領域を学び始めたころ、上谷雅孝先生(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 放射線診断治療学 前教授)に基礎から丁寧に指導いただきました。MRI画像解剖もその1つであり、その学びによってMRIの見え方が一変し、まさに世界が変わったような感覚を覚えました。

同じように、この特集が読者の皆様に新しい視点をもたらし、日常診療に少しでも役立つことを願っております。

最後になりましたが、大変お忙しいなか、貴重な症例と実践的な知見をご提供くださった執筆者の先生方、また企画・編集に際しご協力いただきました稲岡 努先生に、心より御礼申し上げます。

大木 望